　ロズワール邸に使える執事やメイドは複数いるが、それらを束ねるのは執事頭であるタロウだ。醜く肥え太り、エミリアを始めとしたロズワール邸の関係者である女性を好色な目で見る、何も才能の無い中年男――それが、大方の客観的な評価であるような人物だった。

「何かご用命ですか、タロウ様」

　屋敷内にあるタロウの部屋――屋敷に仕える者には、屋敷内に部屋を与えられているが個室をあてがわれているのは執事らの中でもタロウだけだった――に呼び出されたラムは、いつも通り不愛想な様子で上司の部屋を訪れていた。

　彼女を呼んだ当の本人は、ニタニタと笑っているだけなのに、どこか不快感を感じさせるような表情・姿勢でラムを迎えていた。

「なんじゃ。わしとラムの仲だろうに、よそよそしいじゃないか。もっと近くに寄れぃ」

「……っ！」

　慣れ慣れしく、手招きをしながら誘ってくるタロウに、ラムは不愛想な中にも明らかな不快感を示す。

「今は立て込んでいますので……遠慮しておきます」

　顔を背けながらラムが言うと、タロウはますますそのニタニタとした気持ち悪い笑顔を深くする。

「可愛くないのぅ。お前みたいな貧相な体だと、もっと一生懸命媚びんと二度と抱いてもらえんぞぉ？」

「ぅ……っ！」

　ねっとりと挑発をするような、誘惑をするような、とにかく不快の象徴であるような声に、ラムはわずかに呻くような声を漏らす。

「今じゃ、お前の飼い主のロズワールの所よりも、わしの方に来る回数の方が多くなっているじゃないか？　ん？」

「――黙りなさい」

　悔しそうに歯噛みしながら、ラムにはそれだけ言うのが精一杯だった。何かに耐えるように、左手で右腕をギュッと掴んでいた。

「ぐふふふふ。心も体も、とっくにラブ堕ちしておるのに、そうやって素直になれんところがお前の良いところじゃ。ほれ、舐めろ」

　極めて不自然な流れで、極めて自然のようにタロウがズボンをずり下ろして、ポロンと肉棒をさらけ出す。

「……っ！　はぁ、はぁっ……！」

　それを見て、漂ってくる雄臭がラムの鼻孔を刺激すると、ラムはふらふらとタロウへと近づいていき、まだ半勃起状態の肉棒を口に咥え始める。

「んっ……む……」

「よぉ〜し。それじゃ、例の件の報告をしろ」

　ラムの心地よい口内の感触に身をまかせながら、タロウがラムに言う。

「あむ……んぐ……ちゅば……バ、バルスは……レムとアーラム村にはいったようですが……んちゅ……ちゅば……ちゅううっ……結局、最後の一線は越えていないようです」

「んんんぅ〜〜？　言葉使いがなっとらんなぁ。チンポ成分が足りんか？　ん？」

「っっっ？」

　肉棒をしゃぶりながらラムが喋ると、舌が動きで心地よい刺激がタロウの肉棒を刺激する。するとドプリ…と、濃厚な雄成分が詰まった先走りがラムの舌の上に出され、その強烈な味はラムの脳を刺激し、理性をドロドロに溶かしてく。

「はぁ……はぁ……れろ……バルスとレムは……ちゅっ……ちゅううう……アーラム村のヤリ部屋で、乳繰り合いをしてイキまくったみたいですが……あむっ……ちゅばっ、ちゅばっ……バルスは童貞チンポをレムのトロトロオマンコに挿れて、童貞卒業はしなかったみたいです。んっ……んっ……んっ……チンポ、美味しっ♪」

　口内で肉棒が硬くなり膨張していくと、雄の味がラムの鼻を突き抜けていく。そうすればラムの思考をぼやけさせいき、性の興奮で脳が満たされていく。

「ぶふぅ〜……あ゛〜〜、ツンデレがデレた時の媚び媚びフェラ、マジサイコーぉ♪　うおっ、すっげ！　もっとカリの部分を舌で責めろっ！　おおおぉ〜〜、そこそこそこ♪　気持ちいいっ♪」

　ラムの報告を聞いているの聞いていないのか、ラムが肉棒を手で固定するように持って、言われるがまま舌を動かして亀頭の部分を擦るように刺激すると、タロウは嬉しそうに豚

のような喘ぎ声を漏らす。

「ふぅ、ふぅ……しかし、貧相な姉とは違って、ボンキュッボンの上に気立てもよくて性格も極上のレムに誘われてもヤラんとは、あの童貞小僧インポなんじゃないかぁ？」

「ん……ぢゅ……んぢゅ……タ、タロウ様……お願いですから。レムには手を出さないでください……んむ……んっ……んっ……んっ……」

　顔を動かしながら肉棒を味わうラムだったが、そうタロウに懇願する声は、大切な妹のことを心の底から気にかけているのが分かる。

「分かっておる。ちゃ〜んと約束通り、お姉さまがわしに身体を差し出しているから、大切なレムりんには手を出しておらんぞ」

「ほ、本当ですか？　あの娘が自分から男を誘うなんて……んんんんんんっ！？」

　タロウの言葉を疑うような態度を示すラムに、タロウはその小さな頭を抑え込みながら腰を振って、ラムの口内を犯すように肉棒をピストンさせる。

「まあ、お前やエミリア様のように、今この屋敷は発情した雌で溢れておるからのぅ。その気に当てられたんじゃないかぁ？　『このままじゃ愛するスバル君が、エロエロビッチになったエミリア様に逆レイプされちゃう♡』ってな感じで♪」

「んんぐっ……んんんんん〜っ……んふっ……げふっ……！」

　タロウはさらにラムの後頭部を抑え込んで腰を突きだすと、喉奥をぐりぐりと肉棒で擦るイメージで、腰を卑猥にカクカクと動かしながら続ける。

「あの痛々しい童貞小僧が他の女に夢中になっているのを、あのビッチハーフエルフに見せつけて寝取るつもりだったが、あの女思った以上にチョロいから、その必要もなさそうじゃ。くかか、せっかく童貞を捨てるチャンスをやったのに、もったい無いことをしたのぅ」

「〜〜〜〜〜〜っぷは！　けほっ、ごほっ……！」

　ラムの口内へ先走りを塗り付けるように、頬や歯の裏側まで、徹底的に肉棒をこすりつけて、タロウはようやくラムの口を解放する。

「いいか、よく聞けラム」

　苦しさで涙を溜めながらせき込むラムのピンク色の髪を、タロウは乱暴につかみ上げて、顔を寄せる。

「エミリアの方は、もうすっかりビッチに出来上がってる。そのうち、スバルを誘うかもしれん。勝手にそうしないように管理はするつもりだが、その時に使い物にならないように、お前が徹底的に搾り取れ」

「けほっ……けほっ……ラ、ラムがですか？」

「他に誰がいる？　レムでは無理だったんだろう？」

「レムで無理なのに、ラムの誘いに乗ってくるとは……」

「誰が誘えと言った？　無理やり枯れるまで搾り取ればいいんじゃよ。ああ、穴は使わんでいいぞ。せっかく脱童貞のチャンスをやったのに、それを無下にするような奴には必要ない。ただ、それ以外なら何でもやってやれ」

「はぁ……はぁ……」

　口の中に残った雄の味と匂いで、頭の中がガンガンとするようだった。

　速く続きを味わいたい、そんな雌の本能が肥大化してく中、タロウが命じる有り得ない命令にラムの脳が従順に従おうとする。

「ああ、そうそう。童貞小僧に振られて欲求不満になっているレムが勝手に暴走しないよう、レムもお前が姉としてちゃんと満足させるんじゃぞ」

「はぁはぁはぁ……は、はい♡　分かりましたっ……わかりましたからっ……チンポ、もっと舐めさせてっ♡」

　ガチガチに勃起して唾液と先走りでぬめっている肉棒を目の前に突き付けられ、ラムの理性は性の欲望の前に崩壊する。大切な妹のことですら二の次になってしまったラムは、目を爛々とさせて、お預けをされた犬のように舌を出していた。

　しかし、タロウは意外にも滾りに滾った肉棒をズボンの中にしまってしまう。

「え、なんで……？」

「なんでって、今日からエミリアをハメる日まで禁欲じゃ。一晩中でもヤリ続けられるわしと、搾りつくされて使い物にならん童貞小僧との差を見せつけるためにな。くくくく……あのエロハーフエルフ、わしのセックスでチンポにベタ惚れさせて依存させてやるからのぅ」

　心底楽しみそうに笑うタロウに、ラムは完全に置き去りにされたような顔で呆然として

いた。そうしてずっとそこにたたずむラムに、タロウはうざったそうな顔を向ける。

「なんじゃ、まだいたのか？　とっとと帰れ。あの小僧を搾り取るなり、姉妹でレズったりと、仕事はたんまりあるじゃろ。わしはこれから精力をつけるための食事と休憩じゃ。分かったな」

「――はい」

　最初から最後まで自分の欲望が一番で、他人のことはどうでもよい。自分本位、我儘、手前勝手――それら言葉では足りないくらいの最低の男だった。

　ラムの下腹部はそんな男にも容赦なくきゅんきゅんと痛いくらいに熱き疼きいてラムの理性を思考を焼いている。しかしこうなれば、タロウは絶対にラムを相手にしない。ラムは交わりたい雄と交わることは絶対に出来ないことを、これまでの関係で理解していた。

「失礼します……」

　髪を衣服を直して、ふらふらとしながらラムはタロウの部屋を出ていくのだった。